

『田舎教師』における「さびしさ」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷松, 満子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7009

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『田舎教師』における「さびしさ」

谷 松 満 子

はじめに

『田舎教師』（左久良書房、一九〇九（明治四二年一〇月）は、田山花袋が実在した小林秀三の遺した日記をもとに書き下ろした作品である。執筆の直接の動機は、日露戦争従軍から帰国して義兄太田玉若が住職をする埼玉県羽生の建福寺を訪れた際、真新しい「小林秀三の墓」を見て衝撃を受けたことによる。花袋は、先の寺で「私はその前に一、二度逢ったことがあるので、微かながらもその姿を思ひ浮べることが出来た」と『東京の三十年』（博文館、一九一七（大正六年六月））に記している。

同書によると花袋が住職より借りたのは、小林秀三の中学生時代のもものと、小学校教師時代と亡くなる年一年の日記である。花袋は次のように叙述している。

この日記は、あるいはこの小林君の一生の事業であつたかも知れなかつた。私はその日記の中に、志を抱いて田舎

に埋れて行く多くの青年達と、事業を成し得ずに亡びて行くさびしい多くの心とを發見した。私は『田舎教師』の中心をつかみ得たやうな気がした。(略) 日記を見てから、小林秀三君はもう単なる小林秀三君ではなかつた。私の小林秀三君であつた。何処に行つてもその小林君が生きて私の身辺について廻つて来てゐるのを感じた。(傍線、引用者以下同じ)

前半の傍線部分は、小林秀三の日記が小説のもとになつたことを明かしている。後半で「私の小林秀三君であつた」と記している点を、岩永胖氏は次のように述べている。

花袋が「小林秀三君は私の小林秀三」といったときに、花袋自体が何時の間にか小林秀三の外被をきて、弥勒野や行田、羽生を歩きまわつていたのであつて、自己と対立し、自己の観念や嗜好に合わない小林秀三その人のもつている客観的限定はうち捨てられて、小林秀三の外被の中に、花袋の主観が無限定に充満して行つたのである。(『田山花袋研究』白楊社、一九五六(昭和三一)年四月)

岩永氏は前掲書において、「若しも小林秀三なるモデルの存在が知られてなかつたなら、恐らく作者その人がモデルになつてゐるのではないかという錯覚を起しそうな場面が随所に見られる」とも述べている。つまり日記にある主人公の形象ではなく、花袋の主観により主人公が変えられてゐると指摘している。

日記とその対比に関する先行研究に、小林一郎氏(『田舎教師論—モデルの「日記」を中心として—』『国語と国文学』一九五七(昭和三二)年十一月)がある。花袋が日記につけた圈点と小説とを厳密に対照し、次のように記している。

此の作品が「抒情性」とみ初期の少女病的センチメンタルから無縁でないと言はれるのも結局は、此の作品の決定的な事実性である主人公の「日記」それ自体のいだいてある性格であり、又モデル小林秀三氏その人の境遇及び性格が感傷性にとみ情趣的であつたが為であり、更に、此の時期の明治の青年の群に共通に流れてゐた一つの断層が一種の哀感であり、哀愁であつたからなのである。

小林氏は『田舎教師』にある感傷性は「日記」自体が醸し出しているものであり、またモデルの小林秀三の境遇や性格によるもので、単なる花袋の感傷性だけのものではないと論じている。

本稿では花袋が小林秀三日記を読み、事業を成し得ずに亡びて行くさびしい多くの心を発見したと述べている点に着目し分析したいと思う。すなわち「さびしい」心とは何か。さらに成し得なかつた「事業」とは何か。そしてそれを「さびしい多くの心」としている点について考察したい。

以下、本作品を圍繞する雰囲気、醸し出している空気、その意味で作品の基調音とも言うべき大切な語彙となっている「さびしい／＼さびしい」という語の使用状況を確認することから始めたい。

一 『田舎教師』の構想

『田舎教師』の構想に花袋が言及した文章はいくつかあるが、『東京の三十年』の「田舎教師」の項とともにしばしば取り上げられて来たのが「梅雨日記」（『文章世界』（第四卷第一〇号）「盛夏号」一九〇九（明治四二）年八月一日）である。この日記は、花袋が秀三の実家がある武州行田町を訪ね、実地踏査をした明治四二年六月七日から始まっている。

六月七日

予は携へ来りたる日記を示して、当時の交友及び其の状況を聴く。得るところ多し。今津君来る。共に出て、行田の城址を散策す。(略) 当時、わかき人々の群の夜遅くまで歌留多取りたりといふ家を見る。『このさびしい処を、わかい人達は夜遅く伴れ立つて帰つたんですな』などと語る。

この段階において花袋は、熊谷中学校時代の友人に案内され『このさびしい処を、わかい人達は夜遅く伴れ立つて帰つたんですな』と「さびしい」トーンを付与することを忘れない。このことは、作品執筆時にあたる『田舎教師』の筆を執り始む。『四里の路は長かつた』と書きて、あとはいかにしても筆続かず(「梅雨日記」明治四二年六月一日)のなかに「さびしさ／さびしい」が意識されていたことの一つの証ともなるのではないだろうか。

「はじめに」で引用した花袋の「私の小林秀三君であつた」の叙述に戻すと、「秋の寺日記」(『文章世界』第三卷第一四号、一九〇八(明治四二)年十一月一日)には、その部分が次のように記されている。

平凡なる一田舎教師の死！これに意味が無いだらうか。

友の主僧はこれを聞いて、預つて置いた其人の三年間の日記を見せて呉れた。かれに就いての性行逸事をも聞かせてくれた。それから勤めて居た小学校にも行つて見た。今ではかれは私の無一の親友である。『田舎教師』が出来上るまでは、少くとも一日も私の胸を去らぬなつかしい友である。

この随筆は、建福寺に滞在し「妻」の連載原稿を執筆していた三八歳当時の記録であり、花袋が『田舎教師』の構想に言及した文章の一つである。小林一郎氏は(「田舎教師」成立論)『関東短期大学紀要』第四集、一九五七(昭和三二)年一二月)で次のように述べている。

和田謹吾氏の研究によると直接執筆の時期は明治四一年の一月か二月頃には、もう始まつてゐた様に考へられてゐるので、明治四〇年八月頃から明治四一年の初頭には草稿位は書き出してゐたと考へられる。

「梅雨日記」の記述によれば「一八日、雨浙瀝。『田舎教師』の筆を執り始む。」とあるが、和田氏や小林氏の推測どおり建福寺で「妻」の原稿を執筆しながら『田舎教師』は書き出されていたのであろう。

花袋は、小林秀三の墓の前を通つて郵便を出しに行くたびに「かうして年若く死んで墓に築かれて了ふ人もあるのだ」と若い死を悼んでいる。

二 日記の〈中の〉さびしさ

『田舎教師』に登場する「さびしさ／さびしい」は、七〇箇所^①に及ぶ。花袋が執筆にあたり参照し得た日記は、前述の『東京の三十年』にあるとおりに小林秀三の中学生時代、小学校教師時代、死ぬ年一年分であるわけだが、現在残されているのは、小学校教師時代の一年分、すなわち一九〇一（明治三四）年の元旦から大晦日までだけで、それは小説の二五章までの時間にあたる。小林一郎氏によつて発見解読されたこの日記^②は、小林一郎『田山花袋『田舎教師』のモデルの日記原文と解読所収』（創研社、一九六三（昭和三八）年二月）に収められ読むことができる。

全六四章から成り立つ本作品の二五章までに、全体の約六割を占める四一例の「さびしさ」が登場する。『定本花袋全集』を参照枠としておくと、四頁に一回の割合で使用されていることになる。因みに二五章までだとすると、三頁半に一回の登場ということになり、これはかなりの頻度と言つていいのではないか。その「さびしさ／さびしい」を花袋は秀三

日記から「つかみ得た」とするわけだが、彼の日記には次に挙げる五例しか登場しない。

明治三四年五月一日

今朝五時に家を出づ八時に学校着、直ちに授業をする。午後は種々の整理等にて夜手紙を書く今夜も一人にてさびしげなり。

一〇月九日

早く帰る、秋雨漸くはれて、夕方の雲風に動く事早く、夕日金色の色弱し、木犀の香はた香る、黄金色なるものか。夜新聞を見、行田への荷物つゝむ。今日桜蔭より「文芸評論」来る。夜、星かくれて、銀杏の実落ちることはげし。奥栗林に野別入つて庫裏の奥庭に一葉散るもさびしく風の音に、コホロギの声さむし。

十一月五日

午後より雨ふり出づ、秋の野の赤きは、ニレ□ウルシ菊は只黄なるもののみ、蓼の花、漸く色あせぬ秋はやすきんとす、梢さばみ枯葉重ならんとする、野の檜林に雨の音、肅々たり。夜寂しきに玉茗氏我が二階の部屋に來られて談ず新小説、太平洋、日本人かりて見る。土曜日の菊見の散策を約す。天長節以来かの夜会に対する反抗より心すがすがしく折々は聖書を手にせんとも思ひ、たばこをやめんとも思ふ。毎日の教授法の研究に面白し。

一二月一日

八時起床、午前新島と骨夫とに葉書出す、破骨を訪ふ、熊谷へ行きて居らず、父君と話す。午後二時半、母君の心して給ひし馳走をたらふく口にして行田をいづ、羽生に來りて、日暮れぬ、二九日附の松風の封書來り居る。讀みて後半、物狂ほしき事たへん方なく、くりかへし讀み、返事かきたれど狂ほしきま、やみぬ、あゝ渡瀬、あゝ白滝！ 夜日課点の凶画を見、破骨へ久しぶりに手紙かく。今日母君より聞けば、佐藤みつ子の父亡せりと、何となく物さびし、

さはれ恋とにはあらずかし、友道の父も狂ひ出して二七日（八日か）の夜は刀ふりまわせしとか、困りしものよ。長久寺の喜重、一師団に入る。此の頃は学校の生徒の貯金にて、何くれといそがし、昨日より今朝へかけて新声よみきる夜、「□言」をよむ。年末なれば債鬼しきりにいたり、母君いよいよ、心づかひにいます。

一二月二日

久しぶりにて寺へ帰る。吉沢より一六日附にて葉書来れり、夜新聞六日分をよみ、吉沢へ返しし、骨夫へ歌を贈る曰はく、とはにひえてつめたきのらをもてる人のくれゆく年をさて何と見る。

此の間新島へ送らんとて作りし

歌妓白滝の歌

うす紫の振りのそで、かくて打ち舞ふに春の日長く、

美酒に酔ふ夜の殿の、うたげのはての一人さびしく、（以下略）

先に挙げた五月一日の日記に「夜手紙を書く今夜も一人にてさびしげなり」とある、そうしたさびしさに向き合うように日記には手紙を書く場面が多い。熊谷中学校の同窓生と思われる破骨、骨夫に手紙を出すのは、相手を理解し共感しあうためだろう。小説が始まる四月二五日から一二月末日まで、手紙を書いた日を延べ日数にすると七六日になる。一番多く出しているのは熊谷中学校時代の同窓生、新島百介に宛てた二一通の手紙である。

すなわち現実の小林秀三の「さびしさ」は、「一人」でいることから来る孤独によるさびしさであるように思われる。だからこそ「夜寂しき」時に「（太田）玉茗氏我が二階の部屋に來られて談じ」た以降は、気分が高揚したのか「土曜日の菊見の散策を約」してもいる。一二月一日に「物さびし」に続けて「さはれ恋とにはあらず」とわざわざ書かねばいけないのは、秀三の「恋」への憧れ、パートナーを求める思いの裏返しでもあるに違いない。一二月二日の「白滝」に関

連した記述もそれに類するものと思われる。

花袋は、現存している一年間の日記のうち、四九日分をほぼ忠実に作品に取り入れている。その中で注目したいのは、一〇月九日の日記である。再度日記の記述を引用し、作品叙述と比べてみたい。(日記に●印、『田舎教師』には○印をつけ対比した。以下同様)

●九日、早く帰る、秋雨漸くはれて、夕方の雲風に動く事早く、夕日金色の色弱し、木犀の香はた香る、黄金色なるものか。夜新聞を見、行田への荷物つゝむ。今日桜陰より「文芸評論」来る。夜、星かくれて、銀杏の実落ちることはげし。奥栗林に野別入って庫裏の奥庭に「一葉散るもさびしく風の音に、コホロギの声さむし。

○九日。

早く帰る。秋雨漸く晴れて、夕方の雲風に動くこと早く夕日金色の色弱し。木犀の衰へたる香微かに匂ふ。夜、新聞を見、行田への荷物包む。星かくれて、銀杏の実落ちること繁し。栗の林に野分たちて、庫裡の奥庭に「一葉ちるもさびしく、風の音にコホロギの声寒し。(田舎教師一九章)

日記にある「木犀の香はた香る」を、花袋は「木犀の衰へたる香微かに匂ふ」と衰えたるをつけ加えている。衰えたるは、「さびれる」の類語であり、活気を失いさびしくなることであるから、衰えるはさびしさにつながると考えられる。「香はた香る」を「微かに匂ふ」に変え「黄金色なるものか」を割愛したことにより、褪せた木犀の花から、さびしさを醸し出していた。また「野別入って」を、秋の暴風を意味する「野分たちて」に変えた。この部分の日記原文表記は、いささか分かりにくい表現なのだが、「野別入って」だとすると、秀三の行為とも解される。つまり栗林の奥に自分が分け入って「庫裏の奥庭に」散った「一葉の葉を見出した」ということになる。しかし「野分」がたつとなると、情景はずいぶん異なる。言うまでもなく「野分」は、暴風、台風であるから、野分のときに「一葉ちるもさびしく」とはならないはず

である。

日記を引用した直後に花袋は、この部分を総括するように次のように書き表している。

○親しい友達の胸に利己のさびしい影を認めるほど眼も心も覚めて居らなかつた。卒業の喜悅、初めて世に出づる希望—その花やかな影は忽ち消えて、秋は来た、さびしい秋は来た。裏の林に熟み割れた栗のいが見えて、晴れた夜は野分がそこからさびしく立つた。長い廊下の縁は足の裏に冷やかに、本堂の傍の高い梧桐からは雨滴が泣くやうに落ちた。(一九章)

「晴れた夜は野分がそこからさびしく立つた」とあるが、暴風である野分は、はたしてさびしく立つものだろうか。『花袋歌集』(春陽堂、一九一八(大正七)年七月)に「野分」を詠んだ短歌が二首ありそれは次のようなものである。

おほつかな野分吹きある、秋の野の尾花の末のもし火の影

野分けてやつれしまゝのやれ垣にすかりて咲ける菊のあはれさ

一首目は野分が吹き荒れているところを詠み、押し潰されそうな危うさがある。二首目は、野分が過ぎ去った後、その威力を示すような「やれ垣」(破れ垣)がクローズアップされ、いずれも「さびしさ」とは結びつきにくい。花袋は「野分」という語感が醸す風情のみで「作品全体に流れるさびしさのトーンを強調するために「晴れた夜は野分がそこからさびしく立つた」と書いたのではないだろうか。

他にも小林秀三日記にはなく、花袋が付け足した「さびしさ」があるので比較検討しておきたい。

●明治三四年九月一日

…今日は日曜、朝早く帰校すべく行田を立つ、途に破骨を訪ふ。午前一〇時羽生着、二階の取りちらかしたるを一本まづ片付け置き午後二時弥勒へ立つ、大塚氏はまだ来られず、一人にて今宵はこゝに寝る、新しきオルガン弾く、八月の明星見る。

○学校には新しいオルガンが一台購つてあつた。初めての日は丁度日曜日で、校長も大塚さんも来なかつた。其夜は宿直室にさびしく寝た。(一九章)

日記を見ると九月一日に続けて四日、五日と学校に泊まっている。宿直室に泊まると、同僚と話せる良さがある、とりわけ若い教員にとり日頃の悩みを相談出来る場所でもあるだろう。日記に「さびしさ」の記述がないのは、児童下校後の夜の学校は暗闇と静けさに包まれており、ものさびしいは言うまでもないからである。花袋が付け加えた「さびしさ」は、誰も来なかつたことによるものだと思う。

●九月二四日

秋季皇霊祭にて休み、朝六時半起床、玉茗氏と談る。(略)午後、太田氏に太平洋かりて読み、後新体詩「夜の笛」を草し稿全くならず、夕方エノック読む。今日は彼岸の中日として朝より本堂に参詣する人に敷石のカラコロと絶えず中には乙女もあるらんか。

○彼岸の中日には、其原稿がもう大抵出来懸て居た。(略)参詣者は朝から遣つて来て、駒下駄の音がカラコロと長い敷石道に聞えた。(略)参詣するもの、中には、町の豪家の美しい少女も居れば、島田に結つた白粉の半剥げた田舎

娘もあつた。清三は上さんから貰つた萩の餅に腹をふくらし、涼しい風に吹かれながら午睡をした。夢現の中にも鐘の音、駒下駄の音、人の語り合ふ声などが絶えず聞えた。

結願の日から雨がしと／＼と降つた。さびしい今年の秋が来た。(一九章)

翌翌日の日記に「今日も日暮れて雨に会ふ」との記述はあるが、季節の変わり目に「しとしと」と静かに降る雨ではないようだ。先の一〇月九日の日記でも確認したように、秋の長雨と「さびしさ」を結びつけ物語を進行させている。

●一〇月二一日

秋の夕の野に旅人ありて道を問ふ、我れも他郷のよきは知らぬ身の只町への道をのみ答へぬ。彼は今宵、梅沢と云ふ宿屋に行くよ。今するがだいのながしまよしこに手紙送らんとて書く。

○一日、学校の帰りを一人さびしく歩いた。(略) ふと、路の角に来ると、大きい包みを背負つて、古びた紺の脚絆に、埃で白くなつた草鞋をはいて、さも勞れ果てたといふ風の旅人が、ひよつくり向ふの路から出て来て、『羽生の町へはまだ余程ありますか』と問うた。(略) 何故ともなく他郷といふ感が烈しく胸を衝いて起つた。かれも旅人、われも同じく他郷の人！かう思ふと、涙がホロ／＼と頬を伝つて落ちた。(二〇章)

小林秀三の日記には、事実が多く記されており感情と感想は少ない。花袋は道を問われた記述に自身の感情と感想を入れてゐる。「はじめに」で岩永氏の「花袋の主観が無限定に充満して行つた」という説に頷ける箇所である。

●十一月二三日

朝より熱心に小供集まる、八時半引きつれて羽生に向ふ。一二時までマツチして全く話にならぬ。晴負となれり、二時小供と別れて行田に帰る、(略)夜破骨を訪ふ驚くばかり彼れのサバケて今夜も(昨夜も)芝居へ行くとして誘はる、微山、今津などと共に行く、自分は二幕目にてにげて帰る。直ちに此れ等の事など新島に書き送る。新島より新声に手紙添えて来れり。

○この前の土曜日に、清三は郁治と石川と澤田とに誘はれて、此頃興行してゐる東京の役者の出る芝居に行つたが、友の調子も著しくさばけて、春あたりは敢て言はなかつた戯談なども人の前で平気で言ふやうになつた。郁治の調子も何となく碎けて見えた。清三は、はしやぐ友達の群れの中で、さびしい心で黙つて舞台を見守つた。

二幕目が終ると『僕は帰るよ』かう言つてかれは立上がった。(二三章)

秀三は球技大会引率のため、前日学校に泊まっていた。当日(土曜日)校外引率で二時まで仕事をし、加えて試合の内容も悪く沈んでいたと思われる。

夜、熊谷中学校時代の友人に誘われて芝居に行くが、途中で「にげて帰る」のは、小学校教師としての自分と友人との間に溝を感じ、積極的にその場を離れたのである。小説では「さびしさ」が強調されているが、むしろ呆れたのではないだろうか。花袋は友人との関わりを小説のなかに多く取り入れ、主人公の心の変化を現している。

因みに『田舎教師』に近接する、花袋の作品である『蒲団』『生』『妻』における「さびしさ」の用例数を示せば以下の如くである。(頁数は、『定本花袋全集 第一巻』)

『蒲団』(明・四〇) さびしい・二例 淋しい・六例 寂しい・一例 (合計九例／全八七頁)

『生』（明・四一） さびしい・六例 淋しい・一一例 寂しい・三例（合計二〇例／全二一六頁）
『妻』（明・四二） さびしい・一二例 淋しい・一七例 寂しい・二例（合計三一例／全二九七頁）

『蒲団』は明治四〇年、『生』は明治四一年、母親を亡くしたときのことを題材とした小説であり、『妻』は『田舎教師』と同じ年に書かれている。これらの小説には「さびしさ」が約一〇頁に一度の頻度でしか出てこない。したがって近接する作品と比べても、『田舎教師』の七〇例（四頁に一度）は多いと言えるだろう。それだけこの作品には基調音としての「さびしさ」があふれている。

この「さびしさ」の実体を、検討する為のもう一人の「さびしい」青年、西萩花³をとり上げてみよう。西に関してはすでに小林一郎氏の詳細な先行研究がある。

三 西萩花のさびしさ

花袋は秀三の日記を読み、『田舎教師』の中心をつかみ得たとする一方で「この日記がなくなるとも『田舎教師』は出来たであらう」と述べている。その点について、小林一郎氏は、『田山花袋研究―博文館時代（三）―』桜楓社、一九八〇（昭和五五）年二月）で次のように述べている。

「三十四五年―七八年代の青年を描かうと心がけた」と言っていることにも連関する。（略）小林秀三は直接的なものとして『田舎教師』を支えていたであろうが、花袋自身自己の青年時代の不遇に重ねあわせて、もう少し一般的な問題として「小民」の心と実態とを描こうとしたのである。その意味で『田舎教師』は小林秀三のみでなく、もつと全

体的な問題として、この西萩花のことも、考慮にいれなければなるまい。

私はこの論述に注目し、地方の文学青年である西萩花を視野に入れ、花袋の行動を中心に次の表にまとめた。

年 月	出 来 事
一八八四(明治一七)年三月一日	小林秀三生まれる
一八八九(明治二二)年三月一七日	西萩花生まれる
一九〇一(明治三四)年三月二八日	小林秀三 熊谷中学校卒業(一八歳)
一九〇一年四月二五日	小林秀三 弥勒高等小学校に赴く
一九〇四(明治三七)年四月二一日	日露戦争に従軍(写真班)
一九〇四年九月一六日	日露戦争より帰国
一九〇四年一二月四日	郷里の館林の教育会で「第二軍従軍談」の題で講演
一九〇四年一二月五日	建福寺に太田玉茗を訪ね、小林秀三の墓標を見て衝撃を受け題材を得る
一九〇六(明治三九)年三月一五日	花袋主筆の『文章世界』創刊
一九〇七(明治四〇)年九月	『蒲団』を「新小説」に発表
一九〇八(明治四一)年七月七日	西萩花 死去(享年二〇歳)
一九〇八年四月一三日～七月一九日	『生』を「読売新聞」に連載(八〇回)
一九〇八年七月一九日～八月九日	九州旅行に出発、耶馬溪で西萩花墓参「九州より」『文章世界』(七月二三日執筆)
一九〇八年一〇月一四日～一九〇九年二月一四日	『妻』を(新聞「日本」)に連載(一二〇回)
一九〇九(明治四二)年六月一八日	『田舎教師』の筆を執り始む。「四里の道は長かった」と書いて、あとはいかにしても筆続かず。(梅雨日記)
一九〇九年一〇月二〇日	『田舎教師』を単行本で左久良書房より刊行

前の表は小林一郎氏「日露戦争従軍」『自然主義作家 田山花袋』（新典社、一九八二（昭和五七）年一二月）を基に作成したもので、姓名が未記入の事項は全て田山花袋に関するものである。

明治三十七年九月二二日、小林秀三は結核に侵され亡くなる。一方明治三十九年三月に花袋主筆の『文章世界』が創刊され、その時からの投稿者であった西萩花は、二年あまり投稿したのち明治四一年七月七日に病を苦に自から生命を断った。花袋は同じ年、『生』を書き終えてから九州旅行に出発し大分県耶馬溪で西萩花の墓参りをしている。このことを田山花袋主筆『文章世界』第三卷第一二号（一九〇八（明治四一）年九月一五日）に「九州より」という紀行文として掲載した。小林一郎氏が「もつと全体的な問題として、西萩花のことも考慮にいれなければなるまい」と言及した根拠の一つである、「九州より」の後半部分を左記に引用する。

僕は此れまでも田舎の青年の死といふことを考へたことは幾度もある。才を抱き志を抱き空しく田舎に埋れて了ふ悲哀は到る処にある。僕の書かけて居る『田舎教師』もさうした人間を書かうとするのだ。田舎寺の墓地の一隅の小さき墓石、其下に志を抱いた若い青年の銷せざる魂が眠つて居ると思ふと、僕は堪らない。僕だつて君だつて、一つ間違へば、さうした運命に邂逅さぬとも限らなかつたのだ。萩花君は弱かつた。悪く言ふと、感情一方で意気地が無かつた。けれど君も僕もかれに対して強い言葉を加へることは出来なかつたのだ。彼は健な身体ではなかつた。憤を發して自己を開拓しやうとしても、それが既に根本的に出来なかつたのだ。（後略）（七月二三日、豊前宇佐より）

右の傍線部は、『田舎教師』の執筆について述べている。西萩花の墓参りをすませた後、あまりのシヨックに九州から帰つてすぐに書いたと言われている。これが「明治四一年九月の「早稲田文学」の彙報欄で既に『田舎教師』を百枚書いている」ということにあたる。小林一郎氏は、この節の冒頭の論文で次のように述べている。

『蒲団』の前から構想し、四二年の六月頃まで直接筆がおろせなかつた花袋を一気に八月までにその三分の二程書き上げさせた原動力は、少くとも西萩花の墓を訪れたことであつたと言つても過言でない。

小林氏は、「病死でないその自殺死が花袋をゆり動かし」墓参りから帰り八月に一気に百枚書かせたという。それは、花袋の酷評が彼を死に追いやったという負い目から来ているのである。花袋は、「青春をどう過すかを文章を通して訴え、文章を書くことによつて生きると言つた姿勢に激しい同調をいだいながら、萩花を愛するが故に、又、病に圧殺されぬために、酷評をしつづけた様に見える」と述べている。私が気になるのは、『文章世界』の発刊の辞に、「敢て論説と言はず、美文と言はず、書簡文と言はず、浮華を排し、形式を排し、臆臆を排するは、今の文を学ぶもの、最も必要とする所なるべし。(略)亦この方針の下に、期する所に向つて邁往せんとす。」と謳われており、投書家は文章習練の場と心得ているはずである。

飯田祐子氏は「彼らの独歩——『文章世界』における「寂しさ」の瀾漫——」(『日本近代文学』一九九八(平成一〇)年一〇月)「作文から文学へ」の項で、『文章世界』ははじめから文学雑誌として成立しえたのではない。雑誌を構成する読者の期待そのものが変化してはじめて、『文章世界』は文学雑誌として存在しうようになるだろう。」と論じている。

読者の期待は『文章世界』第一巻第二号の投稿募集の「本誌は作文研究を目的とせる」や「其選評殊に丁寧親切を旨とし、意足りて文伸はざるものの如きは勉めてこれを添削して以て紙上に掲載せんことを期せり」等の文面に現われている。したがつて投稿者自身も、氣に入る文章にするまで書き直す覚悟をしたことが伺える。

西萩花は、『文章世界』第二巻第五号より毎月のように小説に応募しているが、当選せず本文は掲載されていない。一例だが「ゆふべ」(『文章世界』第三巻第四号(明治四一年三月一五日))に対する花袋(評)は「例の病院生活を書いた

ものだ。作者がかう自己の生活に同情して居ては、小説は出来ん。いつそ此の病院生活を他人に平氣に書いて貰ふと好い物が出来るかも知れん。」と一見冷評だが、小説を書く心構えを教えているようでもある。

實際、花袋は『文章世界』第三卷第二号（明治四一年二月一日）の懸賞小説の評で「今の若い作象の弊は、描写が貧しいといふことが第一だ。唯、自分の思つた事、感じたことを其儘に書くといふ態度で、仔細に其周囲の物象に注意する余裕が無い。従つて作者自身には解つて居ても、読者には其光景やら性格やらが少しも浮ばない。」と記し、「其人物なり物象なりを、裏から表から遺憾なく研究」するように説いている。

小説以外に「文章世界」に掲載された西萩花の投稿文は四二ある。書簡文は葉書を含め一四例あり全体の二／三をしめ、抒情文が七例、タイトルに「病」のつく投稿が五例ある。萩花の心の変化を推し量る可く、初期の投稿と自殺に至る凡そ半年前の投稿文を次に挙げたい。

加藤君への返し（書簡文）（四号文を読みて） 大分県下毛郡上津村落合 西 萩花

君、武雄君！（略）

相模の山の青嵐、恋し／＼の今日此頃を、さても君は損な手紙を飛ばしたものかな。行くよ。行くよ、行かいで什麼する。（『文章世界』第一卷第六号（明治三九年八月一五日））

わが悲哀 福岡大学病院東十号病棟第十室 西 萩花

波の音風の音相和してさびしう響く多々羅の浜べ、痛める足を杖にたすけて孤り人生を想ふ。一九の秋、野にふしでの想ふに慣れたる一九の秋は耶馬にくれて、かなしくも年は筑紫の空に暮れなむとす。噫！暗くさびしく一九年

を送りてやがて二〇の春を迎へんとすれど、病ひは癒えずして涙すでに涸れぬ、(略)

〔評〕文と情と相合ひて、哀傷の意尽きず。(『文章世界』第三卷第二号〔明治四一年二月一日〕臨時増刊四「新詩文」田山花袋選)

吾が悲哀

豊前下毛郡上津村

西 萩花

さらば!

青葉の中に立てる家、その門に佇める老ひし姿と幼き弟と、振りかへる病うどを乗せて俤は徐々と進む、草色の靄ふる山や森や、稲の葉のさびしき友ずれ、小さき村には朝清新の氣ぞ満つる。(後略)

〔評〕西君の抒情文を読んだのも随分長いことであつた。読んで其の哀切な響を聞いて、これは到底机上の空想ではないと想つてゐると、やがて君の葉餌に親しまれてることを知つた。それさへ已に悲しい事実であつたものを、今や君は遂に「暗にたつ我が墓」の主となつて了つたのだ。

私は君が最後の抒情文として此の篇を茲に掲げねばならぬのを衷心から悲しむのである。(『文章世界』第三卷第一〇号〔明治四一年八月一日〕臨時増刊二五「青年文」前田木城選 地賞)

西萩花の最初の書簡文「加藤君への返し」(四号文を讀みて)は、加藤武雄の「都の友に」(第一卷四号、明治三九年六月一五日)に答えたものである。この四号文は、加藤の故郷相模の山一面に咲く百合の美しさを述べ來訪を願う内容となつており、『文章世界』の読者に宛てたものである。萩花は、今にも飛んで行きそうな文で答えており、全快を信じている。しかし亡くなる半年位前には、病の癒えぬ苦しみが「さびしさ」の言葉に現われている。そして最後の投稿となつた「吾が悲哀」の傍線部は、稲の葉のこすれ合う様を友人に見立て、別れのさびしさを込めているようだ。

次の引用は、『文章世界』のなかで書簡の往復が一番多くなされた加藤武雄（冬海）の追悼文である。

断腸の記

相模津久井郡川尻村 加藤 冬海

語る可き事にもあらずまた語りもせざりしかど、今兄に手紙書くに当りて何と無う語り度き心地するに何の厭ふところぞ、あはれさびしき人の世ならずやよし此悲哀の来世迄も又の世迄も続かばつゞけ現在の悲哀と苦悩とに堪へざるもの、君よわれは兄に逢はずして逝くべきなり、秋の風、死にてゆく身も淋しきに柩はあけに塗れよとぞ思ふ。これは五月一四日に落手した手紙の一節である。（後略）

〔評〕この篇に書かれた悲痛なる事実の次第は、わが読者は悉く知つてゐよう。われらはこれについて何事かを言ふべく、余りに余裕がなさ過ぎる心境に在るのを悲しむばかりである。（『文章世界』第三卷第一二号〔明治四一年九月一五日〕）

加藤は右のような死を予感させる手紙を受け取ったが、萩花の悲しみを知り尽した私には「馬鹿な考へを起し玉ふな」と言えなかつたことを告白している。そして耶馬より手紙がこない事実「淋しからう、あ、私も淋しい！」と寂しさを吐露している。

小林秀三と西萩花には、田舎に埋もれた青年という共通点がある。秀三は、家の貧しさから進学できず、萩花は中央の文壇に認められるように努力したが、病のために叶わなかつた。二人とも無名であり、小林一郎氏の指摘するように普通の青年であつた。花袋は普通の青年、事業を成し得ずに亡くなつたさびしい多くの心を書きたかつたのだ。それは、自らの生い立ちと重なり他人事ではなかつたからである。

今回、『田舎教師』から窺える「さびしさ」の分析を中心に論じてきたが、「さびしい多くの心」というには、もちろん小林秀三・西萩花の事例を確認しただけでは十分ではないと考えている。二人を含むより広い若者たちの動向に関しては、別稿を記したい。

注

- (1) 『田舎教師』に登場する「さびしさ／さびしい」は、実際には「さびしげ」「さびしく」等、文脈により当然語形は変化しているが、ここではそれらを一括して以下「さびしさ」と表記する。本作品には、全部で七〇箇所で使用されている。表記は、「淋しさ」「一一例」、「寂しさ」五例、「さびしさ」五四例)となっている。
- (2) 小林一郎氏は、『田山花袋「田舎教師」のモデル日記原文と解説所収』において、『田舎教師』の主人公「林清三」のモデルである「小林秀三」の日記が行方不明になって研究に支障を来し、すべて臆測の域から脱する事が出来なかつた旨を述べている。
- (3) 西萩花の名前を、花袋の「九州より」に「故 西 萩 花君の家に行つたことだ」とあり「しゅうか」と呼んでいたが、正式には「はぎか」と読む。萩花の故郷、大分県教育委員会から花袋記念文学館を訪ねて来られた方の指摘による。
- (4) 西萩花のペンネームは、『西萩花』の他に『萩花狂郎』等があるが本稿では、『西萩花』以外は割愛した。彼の作品は『中学世界』にも渡っており、小林一郎編著『もう一つの明治の青春 西萩花遺稿集』（教育出版センター、一九九二（平成四）年三月）に詳しい。